



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大川周明の生命国家論 : 宗教的本質としての「永遠の生命」と国家
Author(s)	伊東, 順真; Ito, Junshin
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 140, 59-79
Issue Date	2022-06-25
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.140.59">https://doi.org/10.14943/b.edu.140.59</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/86256">https://hdl.handle.net/2115/86256</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	06-1882-1669-140.pdf



# 大川周明の生命国家論

## — 宗教的本質としての「永遠の生命」と国家 —

伊 東 順 真\*

### 【目次】

1. 課題と先行研究
2. 生命主義宗教論
3. 「生命」概念の由来— 一生の哲学の受容
4. 生命国家論
  - (1) 日本とアジアへの関心
  - (2) 生命国家論
5. 結語

【キーワード】大川周明, 生命主義, 宗教, 永遠の生命, 生命国家, R・オイケン

## 1. 課題と先行研究

1934年に陸軍省新聞班が発行し、財政界を中心に広く衝撃を与えたパンフレット「国防の本義と其強化の提唱」の冒頭には次のようである。

たたかひは創造の父、文化の母である。試練の個人に於ける、競争の國家に於ける、齊しく夫々の生命の生成発展、文化創造の動機であり刺戟である。(傍点筆者、以下同様)<sup>1</sup>

軍国主義の讚美や統制経済の強化などが謳われた小冊子の有名な一節ではあるが、ここで国家が「生命」であり「生成発展」するものであると見做されている点に注目したい。昭和戦前期にはこうした国家を「生命」と捉える国家観が人口に膾炙していた。例えば『国体の本義』(1937年)では天皇制の正統性の要である「天壤無窮」が「我が國が永遠の生命を有し、無窮に發展することである」と解説され<sup>2</sup>、『臣民の道』(1941年)では満州事変が「悠遠にして崇高なる我が肇國の精神の顯現であり、世界史的使命に基づく國家的生命の已むに已まれぬ發動」であったと説明される<sup>3</sup>。また大政翼賛会の「実践要綱」の公式解説書(1941年)にあっても、「皇國は肇國の始めより皇室を尊き核心と仰ぎ生成發展し來れる全一生命體」と述べられるほどである<sup>4</sup>。このような国家が「生命」であるとする国家観は、アジア・太平洋戦争期の日本に蔓延した顕著なイデオロギーではなかったろうか。

こうした見方に先鞭をつけたのは鈴木貞美であり、彼は近代日本文学の底流にあった「生命」思想とその歴史的意義、変遷に着目し、その思想潮流を「生命主義」として剔抉した。大著『生

---

\* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程

命観の探究』において、鈴木は生命主義を「神でも物質（その運動法則）でもなく、「生命」なる観念を第一義におく、あるいは神や物質と等しい位置に「生命」というものを想定する「生命中心主義」(Life-centrism) もしくは「生命主義」(vitalism) という思潮」と定式化している<sup>5</sup>。鈴木は生命主義研究の注目すべき点は、大正生命主義が1930年代前半から後半にかけて「普遍主義から日本主義への傾斜を深め」たこと<sup>6</sup>、さらに昭和十年前後に「民族の生命」という思潮に吸収されてアジア主義的な傾向を帯び、「アジアへの侵略戦争に、まるで観念的な意味を与え、思想的、心情的に後押しするものとなった」ことを指摘している点である<sup>7</sup>。戦前の生命主義こそは日本ファシズムの哲学観念的な表現形式であり、そうであるならば「生命」を尊重する思想が何故に戦争の惨禍を招来し未曾有の「生命」の喪失へと帰結したのかが問われなければなるまい。そこで本稿では、近代日本における生命主義の系譜を遡り、思想史研究という立場から、生命言説がいかんにして全体主義言説へと接続されえたのかを検討することとしたい。

まず生命主義の先駆とされる人物の一人として大川周明(1886-1957)を挙げるができる。彼がアジア・太平洋戦争期に大きな影響力を持っていた思想家・実践家であったことはよく知られている。大川は東京帝大を卒業後、1918年の老社会への参加を皮切りに、1919年には猶存社を結成し、1925年には行地社を設立するなど精力的に国家主義運動を展開した。1931年には三月事件と十月事件を首謀し、翌年の五・一五事件にも関与するなど、国家改造を企図したクーデター事件にも関わっている。アジア・太平洋戦争のさなかには、代表的著作『日本二千六百年史』(1939年)をはじめ、『米英東亜侵略史』(1942年)や『大東亜秩序建設』(1943年)など、陸続とその日本主義、アジア主義思想について著書を刊行している。その大川が「現実の国家は…(中略)…一個潑刺たる生命を原動力として存立して居る」<sup>8</sup>と国家が「生命」を宿していると述べており、天皇を「総ての生命を統一する最高の生命」<sup>9</sup>とまで高唱しているのであるから、顕著な生命主義者であることは十分な手応えをもって予想される。しかし鈴木は近代日本文学史研究という立場もあってか、大川について正面から問うことをせず、ただ1910年代に彼が「宇宙の生命」を原理とする宗教論を身につけていたと指摘するに留めており、惜しまれる<sup>10</sup>。国家を一つの「生命」と見定める大川の生命国家論はその国家改造思想の骨子と目される重要なものであり<sup>11</sup>、生命主義と全体主義国家の接続関係を問おうとする本稿にとっては好個の対象である。まずは大川の生命国家論はどのような思想であり、それは何処に由来し、いかに展開したかが詳らかにされねばなるまい。本稿は日本ファシズムの理論的指導者であった大川周明が鼓吹した生命国家論に焦点を当て、その思想的背景とともに由来(Herkunft)を問い、生命を第一義に据える思想がいかんにして生命を消尽する国家思想へと接続させられたのかを明らかにする。

大川周明については、先鞭をつけた竹内好や橋川文三による伝記的研究を嚆矢として、松本健一、刈田徹、昆野伸幸、大塚健洋、前川理子による研究の蓄積があり、そのイスラム思想に焦点を当てた臼杵陽による研究もある。しかし生命国家論という観点から大川周明の思想を検討したものは稀である。そのことを、以下、これらの先行研究を概観することで確認しておこう。

先駆的な竹内と橋川は大川のアジア主義思想に着目した。竹内は大川の大アジア主義的傾向を示唆して彼のアジア主義思想の「侵略」的側面を指摘し<sup>12</sup>、橋川は大川がソロヴィヨフに由来する東西対抗史観に立脚した戦争哲学を持っていることを指摘し、彼を独自の戦争哲学を持つ超国家主義者の先駆的人物と位置づけ、そのアジア主義思想を「全アジア主義」と把握し

た<sup>13</sup>。また、竹内は大川のイスラム研究の学問的功績を評価し、彼における「イスラム」が一貫して祭政一致の理想的宗教であり続け、同時にそれは彼のアジア侵略思想とは無関係であったと主張するのである<sup>14</sup>。こうした竹内の主張を批判したのが臼杵であり、大川にとってのイスラムは、トルコ革命を機に、彼自身のアジア主義思想を体現する祭政一致のモデルから内面的思索の対象へと変化したと論じている<sup>15</sup>。

松本、刈田、昆野は大川の宗教思想と国家主義思想の関係には踏み込んでいないものの、大川周明研究としての達成には瞠目すべきものがある。松本は大川の思想の中心に東西対抗史観と皇室中心主義を見出し<sup>16</sup>、彼の国家改造論の柱として行地社七綱領のうち「維新日本の建設」と「世界の道義的統一」の二点を挙げ、大川思想の特徴である国内改造とアジア主義思想の連関を的確に指摘している<sup>17</sup>。刈田の方は大川为国家改造運動の思想形成期に焦点を当て、豊富な一次資料を駆使して大川の交友関係や彼の著述を分析し、特に社会教育研究所と大学寮について明らかにするなど、大川研究の水準を一段引き上げたものと評することができる<sup>18</sup>。また昆野は大川の思想を、〈日本的なるもの〉に貫かれた歴史観から鼓吹された、国民の主体性発揮と対外膨張を論理づける独自の革新的な国体論であったと結論づけている<sup>19</sup>。大川の著作から彼が日中戦争を「世界維新の実現」のための「神聖な任務」と正当化した点を指摘し、彼の国家改造思想が「国内改革」と「対外侵略」の両側面を持っていることを具体的に論証しえている<sup>20</sup>。

他方、大塚と前川は大川の思想形成期の宗教論や彼の国家改造思想の基礎となった道德哲学にまで立ち入っている。大塚は大川が日本主義・社会主義ないし統制主義・アジア主義を唱道したと分析している<sup>21</sup>。しかし大塚は松本と異なり、行地社七綱領のうち「維新日本の建設」と「国民的理想の確立」に大川の国家改造思想の二つの核を求めて分析・考察を行ったわけだが、アジアそして世界への拡張を志向し対外侵出を正当化した側面について十分に説明し得ているとは言い難い<sup>22</sup>。また、大川の生涯を「宗教学者から実践運動家へと転じ」たと理解したことには疑義が残る<sup>23</sup>。その点、前川が宗教家としての大川を正面に据え、彼の天皇制理解における宗教的側面に焦点を当てて国内外に多大な影響を及ぼした大川の言動を「日本人を巻き込み、アジアや世界を巻き込もうとして行われる大川自身の宗教的生活」、あるいは「手前勝手な「事天の途」、他に盲目の自我実現教」と総括したことの意義は大きい<sup>24</sup>。しかし前川も大塚と同じく、大川の国家改造の思想を象徴する行地社七綱領の二つを「維新日本の建設」と「国民的理想の確立」と把握しており、国家を超えて拡張しようとする側面についての実証的な分析が十分であるとは言い難い。現に前川は、大川の理想の日本への国家改造と、東洋諸国での戦火をも辞さない対外拡張との「無視できない懸隔」を指摘した上で、後者の論理としてソロヴィヨフの「善戦戦闘」という戦争必要論をやや消極的に当てはめている<sup>25</sup>。しかし大川のソロヴィヨフ理解は、歴史における戦争の意義と、アジアとヨーロッパ間に今にも最後の戦争が起ころうとしているという歴史理解を別個のものと把握したものであり<sup>26</sup>、前川が説いたような、欧亜間の最後の戦争の過程で日本によるアジア内での積極的な戦闘を認めるものではなかった。

ここまで見てきた先行研究を踏まえると、大川の思想のうち日本国家を超えて拡張しようとするアジア主義的側面は、先駆的な竹内や橋川、そして松本や昆野では強調されていたものの、大塚や前川にあっては十分に論じられているとは言い難い。確かに大川は一連の国家クーデター事件に関わった国家改造論者ではあったが、後述するように大川の国家改造思想は国内改

造とアジアそして世界への対外侵出を併せ持つものであった。大川の思想を解明する際に鍵となるのが、彼において共存していた宗教論と国家論の関係である。大塚の「宗教学者から実践運動家へと転じ」たとする表現に端的に示されるように、大川における「宗教」と「国家」は別次元の話として、両者の直截な関係性を説明した先行研究はこれまでなかった。しかし一宗教学徒が宗教研究に留まらず、国家を論じ、国家改造まで主張するようになったことは大川の大きな特徴といえる。このように大川における「宗教」と「国家」を分離して捉えがちな先行研究の見方を再考し、本稿は宗教論者であり国家論者でもあった大川周明を主題化すべく、両者を懸架する「生命」言説に焦点を当てながら、その生命国家論の由来と構造を把握することに務めたい。

## 2. 生命主義宗教論

学生時代以来、大川周明の最大の関心は「宗教」にあった。1886年に山形・庄内の医師の家系の長男に生まれた大川は1899年に鶴岡の荘内中学校へ入学し、その5年後に熊本の第五高等学校へ進学する。大川が中学と高校を過ごした明治30年代は若者を中心として宗教的・哲学的煩悶が問題化した時代であった。一高生藤村操が「巖頭之感」を遺して華嚴の滝に身を投じたのが1903年、綱島梁川が「予が見神の実験」を発表したのが1905年である。こうした時代的雰囲気の中で、家業を継ぐことを宿命づけられていた大川もまた、「人生トハ何ゾヤ。コレ心底ニ往来シテヤ、モスレバ余ヲシテ沈思ニ入ラシムル所ノ問題ナリ。…(中略) …吾迷フ」<sup>27</sup>と、人生論的煩悶を抱えていた。

中学時代、大川は鶴岡天主教会のマトン神父と出会い、聖書に触れてイエスの人格と信仰に強く惹かれるも、既存の信仰や儀礼に執着するキリスト教に抵抗感を覚え、洗礼は受けずじまいに終わる<sup>28</sup>。これ以後、大川は宗教求道の学生生活を送ることとなる。第五高等学校在籍時には、「人生究竟の理想は何ぞや。曰く、宇宙の大霊と合致すること之れなり」<sup>29</sup>と、エマソン(1803-1882)由来の「宇宙の大霊」という言葉を用いて当時の宗教的思索の到達点を記している。しかし大川はこれに満足できず、「真実の宗教」を求めて東京帝大哲学科に進学する<sup>30</sup>。大学では姉崎正治や波多野清一、高楠順次郎、ケーベルらに師事して宗教学やインド哲学を学び、1911年7月に学士論文「龍樹研究序論」を書き上げて卒業する。だが卒業後も定職には就かず、大学在学中に入会した宗教団体道会の機関誌『道』の執筆・編集や参謀本部のドイツ語翻訳などで糊口を凌ぎながら宗教研究に打ち込む自己研鑽の日々を送っていた<sup>31</sup>。詳しくは後述するが、この頃すでに大川は理想とする宗教論の大枠を固めるに至っていた。

1910年代、大川は深く携わった『道』や道会の主宰松村介石が組織した養真会の機関誌『真人』に多くの宗教論を寄稿していた<sup>32</sup>。この間に大川が著した宗教論の一部を挙げると、「久遠の生命」(1914年)、「真人の生活」、「全人的生活」、「生命の完成」、「ベルクソンの生命論」、「養真の意義」(以上1915年)、「活動不息」、「一人のために死ぬこゝろ」(以上1916年)、「三個のL」(1917年)などがある。これらの表題からも示唆されるように、大川の宗教論は多分に「生命」に関わるものであった。では、大川にあって宗教と「生命」はいかに結びついていたのだろうか。

1914年5月発表の「久遠の生命」には、大川の宗教観が以下のように端的に記されている。

肉體を超越し、肉體の家なる地球を超越し、地球の父なる太陽をも超越して、悠久なる生命を得んと此の希望は、たゞ宗教的生活の深みに沈み行きたる人のみが與へられる希望である。…(中略) …神を信じ徳を修め、隣を愛し、而して永遠の生命に入る、これが吾等の最後の目的である。これが吾等の生命の全意義である。宗教は人をして此の自覺を起さしめる事を以てその究竟の目的とするのである。吾等は人に死して神に生きねばならぬ。<sup>33</sup>

大川にとっての宗教の極致が、身体、地球、太陽を超越した「悠久なる生命」を得ること、「永遠の生命」に入ることであると示され、宗教的極致に留まらない人間の理想状態であるとさえ主張されている。ここでの「神」は、当論文でいえば「生命の本源」<sup>34</sup>であり、他の論文では「宇宙の本体」・「天」<sup>35</sup>、あるいは「全體的生命」<sup>36</sup>、「超個人的生命」・「絶対的生命」<sup>37</sup>、そして「宇宙の生命」<sup>38</sup>と表現された宗教的超越存在を指す。大川が思想的格闘の末に達着した宗教論は、唯一無二の「超越的生命」との合一を極致とする生命主義宗教論そのものだったわけである。

この宗教観には、大川の生命世界観が大きく関わっている。大川は、血縁を際限なく遡ることによって全ての人間に連なる一生命に辿り着くことから、「吾等の生命は個人的であると同時に超個人的である」と、個々の生命が孤立的存在ではないと認識していた<sup>39</sup>。こうした生命の連続的、一体的の把握は人間以外にも及び、究極的には全宇宙の生命が根本の大生命の現れであると理解されるに至る<sup>40</sup>。このように連続一体的な生命の延長上に超越的生命が措定されたため、宗教的極致へと達する途として「血縁」が重視されるわけである。功利主義の対極にある「精神」の正しい発露の一つとして父母への孝行が力説されたこと<sup>41</sup>、また氏神こそ自己の生命の源流を意味するものであると述べられたことは<sup>42</sup>、父母への孝や祖先崇拜の念という血縁信奉こそが超越的生命との合一の方途と見做されていたからに他ならない。

後の大川の宗教著作『宗教原理講話』(1920年)を繙くと、宗教的欲求とは「偉大なる超個人的生命と合一して、自己の永遠なる新生命を擲得せんと抑え難き要求」<sup>43</sup>であると説明され、戦後に刊行された『安楽の門』(1951年)では「宗教とは無限の生命に連ることである」<sup>44</sup>と定義され、また遺稿となった「宗教論」にも「宗教の本質は、自己の生命の本源を認め、之を敬ひ、専ら之に随順するに在る」<sup>45</sup>と記されている。その大枠において、超越的な生命との合一を目的とする宗教論は生涯にわたって大川の宗教論を貫いていたのである。

このように明らかとなった大川の生命主義宗教論であるが、それは具体的にどのような特徴を持っていたのだろうか。大川の宗教論をより深く理解すべく、以下に特徴を三点挙げ、分析・考察することとしたい。

まず一点目の特徴として、「生命」との合一の過程には高い精神性と継続的な精神的格闘が要求される点が挙げられる。「吾等は何事よりも前に先づ一個の人格でなければならぬ。今日の多くの人が爲す如く、思索と実践とを分離するが如きは、人生を以て一個の器械となすものである。吾等は飽迄も眞實なる内心の要求に従ひて、知識と情意とを自己の人格によりて統一し、一切の言行が悉く全人的活動であるやうに努めればならぬ」<sup>46</sup>。「生命」獲得のためには、人間は器械ではなく人格であるとする自覺を持った上で、思索と実践、知識と情意とを人格によって不断に統一し続ける生活が求められる。単なる生命ではない「善き生命」が望まれる所以である<sup>47</sup>。肉体と精神との対立は精神への従属を以てこれを鎮め<sup>48</sup>、虚偽を避け、誘惑や利欲に打ち勝ち続ける高い精神性が不可欠となるわけである<sup>49</sup>。しかし、精神が肉体に優越するという論理が肉体の死をも辞さない度合にまで優先されてしまうため、殉死が称揚されるもする

など、生と死の優劣関係が倒錯する事態まで導かれうる<sup>50</sup>。

第二には、延長を持つ個別の生物ではない集合体やその概念までが「生命」として扱われ、その結果「生命」を構成する個々の生命が軽んじられ、時として個の生命の死が肯定されもするという特徴を指摘できる。大川は肉体が滅びることは自明でありいつか死を迎えると前置きした上で、人間と「生命」との関係性を細胞と身体のアナロジーを用いて説明する。つまり、人間の身体が個々の細胞の死滅と代謝というそれらの生死によって生命たりえているように、人類（集団）も各員が順次新陳代謝されることで「生命」たりえていると説く。このとき主眼が個人の物理的生命ではなく「團體の生命」に置かれていることは言うまでもない<sup>51</sup>。「團體の生命は、個人の生死を超越して一貫して居る。…(中略)…信神の人にありては、死とは新たな生命に入る事である」<sup>52</sup>。「団体の生命」の「生」の名の下に、個人の死が「生」と見做される、顛倒した論理がここには認められる。死すべきものが「生命」であるなら、「永遠の生命」、「悠久なる生命」という観念は絶対矛盾に他ならないのだが、人間集団をも生命体になぞらえることでこの矛盾を宗教的に超越しようというわけである。

第三に、1910年代後半より見られる言説であるが、第二の特徴をより具体化した、国家が「生命」と捉えられる点を挙げておきたい。永遠の生命を有した具体的な集団として「国家」を語るようになるのである。大川は「大日本帝国の使命」（1918年）において、次のように述べている。

吾等の求む可きは生命に非ずして、實に善き生命である。個人と國家とを問はず、其の求むる所は單なる生命に非ずして、善き生命でなければならぬ。善を求むる所、理想を實現する所に、始めて個人と國家との存在の意義が發揮される。眞實・堅固・雄大なる理想を確立し、之に向つて向上登高の一路を歩む所に、始めて個人と國家とが不朽の生命を獲得する。…(中略)…げに吾等の祖先、吾等の建國の英雄は、獅子の鬣を振つて此の理想の爲に勇健なる戦ひを戦つて來た。<sup>53</sup>

個人であるか国家であるかに拘らず、「善き生命」であることが求められている。大川は日本が「生命ある国家」として「不朽の生命」を獲得すべきことを説いている。第一の特徴として指摘した、高い理想とその実現過程で継続的な奮闘が求められることは、「国家」にあっても例外ではない。大川の国家への関心については後で詳しく述べることにするが、ここでは国家が生命に準えられたことを大川の生命主義論の大きな特徴として押さえておきたい。

以上、三点の具体的特徴を列挙しながら1910年代の大川の生命主義宗教論を検討してきた。超越的生命との合一を目的とする大川の宗教論は、その過程において継続的な精神的格闘を必要とするものであった。また大川は個別の生命ではない集団をも「生命」と捉え、「団体の生命」として尊重することで個人の生命を蔑ろにしようとする論理を展開していた。そして「団体の生命」に具体的な「国家」が据えられたとき、国家もまた「善き生命」として、「眞實・堅固・雄大なる理想」のための「勇健なる戦い」が求められるのであった。

では、大川が自身の宗教論の枢要に据えた「生命」概念はどこに由来するものであろうか。鈴木貞美が指摘したように、確かに大川の思想的自伝である『安楽の門』には「宇宙の生命」を原理とする宗教について記されている<sup>54</sup>。大川は道会時代、「宇宙の生命」への信仰を説いた宗教者押川方義の教説を耳にしていた。押川は大川を前に「宗教は宇宙の生命を觀得して、之に随順し歸一することである」と力説していた<sup>55</sup>。しかし重要であるのは、大川が続けて「押

川先生の説教は、その内容に於て私にとりて耳新しいものでなかつた」<sup>56</sup>と、当時すでに超越的な「生命」を原理とする宗教を知り得ていたと告白している点である。押川の道会での最初の講演は1912年9月22日であったから<sup>57</sup>、それ以前には耳目に触れていたと思われる。

大川が超越的「生命」概念を獲得した明治末から大正初期という時代について、中村雄二郎は、「近代の機械論に対する「生命論」の表面化」<sup>58</sup>が顕著になり、「ルドルフ・オイケンとかベルクソンとかニーチェ、ショーペンハウエルという思想家たちが、非常に流行っていた」<sup>59</sup>と分析している。明治維新以来、日本は西洋列強に肩を並べるべく富国強兵を掲げて中央集権化、工業化、産業合理化を強硬に進めてきた。しかし明治が終わりに近づくにつれ、死体の山がシンボルとなった日露戦争や、工場ストライキや小作争議の頻発といった労働問題の表面化を経て、直接的な「生命」の危機と不安が意識されるようになっていた。1911年に制定された工場法も、労働者の「生命」の権利（＝生存権）の機運高揚と無関係ではないだろう。こうした状況を背景として、「生命」そのものは機械論的なものではなく生命固有の力が働いているとする生命思想（Vitalism）が関心を集め<sup>60</sup>、西洋哲学に由来する「生命」の思想が流行したわけである。次節では大川が「生命」概念を獲得した契機を探るべく、19世紀後半から世界を席卷した思想潮流「生の哲学」を見ていくこととしたい。

### 3. 「生命」概念の由来—生の哲学の受容

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、西洋では神の不在や科学の隆盛が顕著となった近代化のうねりが人間の生そのものを疎外しつつあるという危機感を背景として、ヘーゲルによって完成した観念論哲学を乗り越えようとする思想潮流「生の哲学（Lebensphilosophie, philosophie de la vie）」が出来た。この哲学思潮は世界の窮極根柢をなす真の実在を精神や物質ではなく「生命（Leben, vie）」に見出したもので、ギリシャ哲学以来の哲学の前提であった合理主義と主知主義を批判した点に従来の哲学との根本的な相違をもつ。具体的な論者としてはA・ショーペンハウエル、F・ニーチェを嚆矢として、ドイツにおけるW・ディルタイ、G・ジンメル、R・オイケン、またフランスにおけるH・ベルクソンを挙げることができる<sup>61</sup>。

西洋の思想界を席卷した彼らの哲学は明治から大正にかけて次々と持ち込まれ、日本でも大いにはやることとなった。そのうち1900年代初頭に一世を風靡したのがR・オイケン（Rudolf Christoph Eucken, 1846-1926）とH・ベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）である。当時の日本に「ベルクソンの大流行」が巻き起こったことは宮山が明らかにした通りであるが<sup>62</sup>、オイケンの存在感もベルクソンに比肩しうるものがあった。例えば夏目漱石が「近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向ふの人が兎や角いふので日本人も其尻馬に乗つて騒ぐのです」<sup>63</sup>と両者への過度の追従を牽制までしたことからはオイケンの流行が窺える。井上哲次郎は「二三年來オイケンの哲學とベルグソンの哲學とは、我國に於て次第に注意を惹いて段々之を研究する者が多くなつて來る有様であります。ところが其中でもオイケンは遠からず我國に來遊すると云ふ噂が擴がつたので、尙更注意を惹くこと甚しくなつて來たのであります」<sup>64</sup>と、オイケンの流行はベルクソンに劣らず、むしろオイケンこそ耳目を集めていると認識しており、トルストイを訳すなどした宗教哲学者加藤直士は「實際今日の我思想界に於てオイケンを解せずしては發言の權を有し得ぬ」とまで述べている<sup>65</sup>。もちろん、オイケンの思想が注目を集め

ていたのが日本に限らなかったことは言うまでもない<sup>66</sup>。1908年にノーベル文学賞を受賞したことも、オイケンの思想の独自性と強い影響力を示す証左に他ならない。

このように日本の思想界で一躍脚光を浴びたオイケンであるが、彼から大川への思想的影響はこれまで取り上げられてこなかった。しかし、大川はオイケンの思想を積極的に摂取し、さらには明示的に言及までしていたのである。大川は「獨逸に於ける宗教思潮」(1912年)でオイケンの『宗教の真諦』および『現代宗教哲学の主要問題』を挙げながら一頁以上を割いてその宗教論を概括し、「現代の人心に最も偉大なる感化を與へて居る」と彼の思想の意義を強調している<sup>67</sup>。特筆すべきは、『新理想主義の哲学』の翻訳出版に際して大川が認めた「新刊 オイケンの『新理想主義の哲学』」(1913年)である。ここには著書そのものとその翻訳が講評されているが、大川はオイケンについて以下のように記している。

オイケンの著書は獨逸の哲學界に於て最も多くの讀者を有し、數ある著作は悉く版を重ね、今尚ほ新版に次ぐに新版を以てして居る。こは思想界に於ける新しき運動の勢力を最も力強く證明するものに外ならぬ。近代的教育の効果を讃える歡呼の聲も、自然科学の勝利を祝ふ凱歌の音も、次第々に鳴りを鎮めて、新しき生命に對する憧憬、永遠なるものに対する渴仰の情が、人々の心の至深處に燃立ちそめた時に於て、吾等の生活に全體としての價値を與へ統一的の意義を賦せんとするオイケンの哲學が、うれしき音づれとして多くの人々に歡び迎へられるのは當然の事である。…(中略) …オイケンの哲學が吾等の爲に力強き福音たるは、彼が吾等の眞の教師たる資格を遺憾なく具へて居るからである。<sup>68</sup>

ドイツの哲学界で多くの読者を獲得し、次々と著作を発表しているオイケンについて、大川はその思想の新しさと私たちの生活に価値と意義をもたらす点を高く評価し、オイケンの哲学は「うれしき音づれ」・「力強き福音」であり、オイケンこそ「眞の教師」であるとまで称揚しているのである。他にも、五高時代に師と仰いだ牧師榊原政雄への書簡(1913年)や論文「養眞の意義」(1915年)にもオイケンへの言及は確認される<sup>69</sup>。語学に卓越していた大川であったから、オイケンの著作をいずれも原著で読んでいたことは想像に難くない<sup>70</sup>。

では、大川が積極的に受け止めたオイケンはどのような思想を展開していたのだろうか。オイケンはドイツ北西部のアウリッヒに生まれ、ゲッティンゲン大学とベルリン大学に学び、バーゼル大学に招聘されたのち、1874年にクーノ・フィッシャーの後任として、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらが教壇に立ったイエーナ大学の哲学教授に就き、その地に没した哲学者である。主な著作に*Die Lebensanschauungen der grossen Denker*, 1890 (『大思想家の人生観』, 1912年), *Der Kampf um einen geistigen Lebensinhalt : neue Grundlegung einer Weltanschauung*, 1896 (『新理想主義の哲学』/原題『精神的生活内容の爲めの戦』, 1913年), *Der Wahrheitsgehalt der Religion*, 1901 (『宗教の真諦』, 1914年), *Der Sinn und Wert des Lebens*, 1908 (『人生の意義と価値』, 1914年)がある。

オイケンを紹介した著作物は、最初期のものとして1900年の『児童研究』の「オイケン氏に就きて」を確認でき<sup>71</sup>、以後は哲学思想関連誌ではなく『開拓者』(日本基督教青年会同盟)や『神学之研究』といった宗教誌での論及が続く。彼の思想を正面に据えた本格的な解説書は稲毛詛風『オイケンの哲学』(1913年)を皮切りに、伊達源一郎編『オイケン』(1914年)、三並良『オイケンの哲学』(1914年)と相次いで登場している。著書の翻訳状況に目を向けると、

1912年の『大思想家の人生観』の訳出を嚆矢として立て続けに行われている。1914年には既に8冊の著作が邦訳されており、この時点で翻訳の数でいえばカントをも凌駕するものであった<sup>72</sup>。

オイケンにあって、その根本思想は彼が実在の本質と見做した「精神的生命／靈的生命 (Geistesleben)」にある。『現代宗教哲学の主要問題』には、以下のように端的に説明されている。

靈的生命は、吾人々類をして宇宙の無限性に参加する事を得しめ、且つ靈的生命其ものを顯現する過程に於て、人をして更に新らしき更に豊富なる又更に眞實なる人格を造り上げしむる所のものである。…(中略)…此新生命は宗教と最も密接なる關係を有する、何となれば、正面より此自然の世界に對抗して、大膽に之と應戦する所の心靈の根本的勢力並びに獨立的態度は、單なる人間の個性から發生し來ることは出來ず、又決して或一定の自然的並びに社會的秩序の産物でもあり得ぬものである<sup>73</sup>

ここに明らかなように靈的生命は倫理的宗教的内容を持つ内面的な実在で、これと対峙する物質的自然法則的な自然的生命と峻別される。自然界の在り方である自然的生命は常に人間の精神領域を脅かすため、我々は高い精神性を以てその侵入を防ぎ、かつそこから脱却すべく奮闘し、靈的生命を獲得して永遠性と無限性を自己に実現せねばならないとオイケンが主張する<sup>74</sup>。このように活動的実在として示された靈的生命の創造的過程は「生命過程 (Lebensprozess)」と称される。ここで重要なのは、オイケンが絶対無限なる宇宙すら靈的生命の直接的範疇と捉えていることである。「靈的生命なるものは…(中略)…人間を導きて斬新なる宇宙の本質に到らしむとは吾人が研究の要點なりき」<sup>75</sup>。つまり、自己のうちに靈的生命を実現することとは、宇宙的生命との合一という超越的極致を意味するわけである。靈的生命は、オイケンにとっての普遍的な宗教的超越存在(「神」)が、その擬人性を排除されて宇宙の実在の本質をよりの確に示すべく表現された存在であった<sup>76</sup>。以上のような靈的生命が、人間の精神性を疎外する文明の隆盛、そして主知主義に象徴される当時の学問の在り方を背景として、それらを克服するものとして提示されたわけである<sup>77</sup>。

前節で見てきた通り、大川が1910年代に高唱していた生命主義宗教論は、超越的な「生命」との合一を極致とし、その実現過程に継続的な精神的格闘を必要とするものであった。大川における「生命」概念とオイケンが説いた「靈的生命」はいずれも宇宙論的な超越的「生命」として等しい存在であり、大川、オイケン両者ともその「生命」との接合を人格の理想的極致に据えていた。さらに、「生命」との合一を実現する過程において、自然的身体に優る高い精神性を継続的に奮闘させ続けることが不可欠であると見做した点も、両者の生命思想に共通している。個人の人格の理想境地を示す論理として、オイケンの生命主義哲学と大川の生命主義宗教論はこのように驚くほど酷似していたわけである。大川がオイケンの生命哲学を絶賛していたことは先に検討した通りである。大川がオイケンの生命哲学を摂取したことは、もはや論を俟たない。

とはいえ、オイケンにはなく大川にのみ見られた生命思想の特徴もあった。理想の境地を目指す生命主体はオイケンにおいては「個人」であったわけだが、すでに前節で指摘しておいたように、大川にあって「生命」は「団体の生命」へと拡張し、具体的な「国家」をも射程に入

れたものとなっていた。「国家」が超越的生命との合一を目指す主体に据えられたことは大川の生命主義思想の大きな特徴であった。

ここで問題になるのは、大川における「宗教」と「国家」の関係である。理想の宗教論として結実したはずの生命思想は、大川において容易に世俗的な国家論へと展開されたのである。大川における「生命」が超越的な生命であったことは先に見てきた。その実、大川は、「吾等は便宜のために過去・現在・未来と区劃して居りますが…(中略)…実は分ち難き生命の流行があるだけであります」<sup>78</sup>との確言に決定的なように、「生命」を世界の究極根柢をなす原理として把握していたのである。「生命」こそが世界の根柢原理であるとする見地から大川は、「生命」の内的的表出を「精神」に、外面的表出を「政治経済」に見出し、それぞれの最高段階を「宗教」と「国家」と捉えていたのであった<sup>79</sup>。宗教論者であった大川が国家論を説くことは一見錯綜した事態であるが、真の実在である「生命」の議論の展開という観点からは理解することが可能である。本来連繋するはずのない宗教から国家への飛躍は、大川の生命主義思想が可能ならしめたわけである。

ただし、学生時代以来の思想的格闘の末、超越的な「生命」概念に逢着こそした大川であったが、現実世界においてはその対象を見出せずにいた。宗教研究を通して「宇宙に超在し、且つ宇宙に内在する最後の實在」<sup>80</sup>であるウパニシャッド哲学のブラフマン（「梵」）や「宗教と政治とに間一髪なき」<sup>81</sup>姿を見せる政教一致のイスラムを知り、あるいは「政治家として現はれたる印度精神」<sup>82</sup>と評価したガンジーや「古今東西の偉人のうち、最も強く翁の魂に心惹かれた」<sup>83</sup>西郷隆盛といった称賛すべき人物を学びはしたものの、あくまで大川の思想研鑽の域を出ず、彼が全生涯を傾倒し得る同時代の対象ではなかった。そのような中、いくつかの契機を経て、大川は現実の相に顕現した「永遠の生命」を「国家」に見出すこととなる。

## 4. 生命国家論

### (1) 日本とアジアへの関心

宗教学徒であった大川は1910年代前半に「日本」に回帰し、「アジア」に覚醒することとなる。それらの関心はどのようにして喚起されたのだろうか。まず「日本」へ目覚めた経緯から見ていこう。大川周明が「国家」に目を向けた直接の契機は、1912年春、道会での活動の一環として松村介石に歴代天皇記（「列聖伝」）の執筆を勧められたことである。提案に応じた大川は『古事記』や『日本書紀』を始めとする六国史を読む中で日本歴史に関心が向かい、「眞個に一日日本人として眼覚め」たのであった<sup>84</sup>。同年の明治天皇崩御と乃木希典殉死という事件の影響も見落とせない。「明治」という一つの時代の終焉は大川に大きな精神的動揺をもたらし、「今や自分に取りて最も神聖なるものは大和魂」とまで思い至らせた<sup>85</sup>。こうした「日本」への意識は米騒動（1918年）を機に昂じ、行動に移されることが決定的となる。第一次世界大戦は日本の好景気と産業の発展をもたらした一方でインフレーションによって貧富の差が拡大したわけだが、資本家や成金と政治家との癒着は物価を高止まりさせ、国民生活は不安に陥っていた。大川はこのような資本の論理と政治腐敗こそが、シベリア出兵という国軍の一大事にも拘らず国民が暴動を起こすという国家の緊急事態を招いたと理解し、「日本国家は此の儘では不可」という強い危機感を抱き、国家改造を決意したのであった<sup>86</sup>。

「アジア」への関心という点では、東京帝大時代に出会った岡倉天心（1863-1913）と、サー・

ヘンリー・コットンの著書『新印度』（1885年）からの影響が大きい。岡倉は1910年に東京帝大の非常勤講師として「泰東巧芸史」を担当したが、これを大川は受講していた。大川は岡倉に非常に入れ込んでおり、彼の『東洋の理想』（1903年）の邦訳出版を試みたほどであった<sup>87</sup>。実際、大川は自著で岡倉の講義と著書を称賛し、「深刻鮮明に亞細亞精神の本質を提示せられた。本書の第一章は實に全部を氏の著書並に講義に負ふものである」と、彼のアジア思想を摂取したことを告白している<sup>88</sup>。なお、『岡倉天心全集』に収録された岡倉の詳細な講義録「泰東巧藝史」（筆記者不明）も、大川によるものであると推定されている<sup>89</sup>。本稿が岡倉から大川への思想的影響に注目するのは、アジア主義思想の文脈のみならず生命主義研究の継受という側面もある。有名な冒頭文「アジアは一つである」から始まる岡倉の代表的著作『東洋の理想』では、アジア思想の精神の粹として日本中世の美術が評価される中、「美」が超越的な「宇宙の大霊」、「宇宙の生命」によって表現されている<sup>90</sup>。この表現は既述の通り、若き大川の著述にも認められるものであり、岡倉からの思想的継受が示唆される。また大川がコットンによる『新印度』を手にとったのは1913年であった。大学で印度哲学を学んだ大川にとってインドは「婆羅門鍛練の道場、仏陀降誕の聖地」であったが、『新印度』からイギリス統治下の印度の惨状を知り、「驚き、悲しみ、且憤」る<sup>91</sup>。大川は西欧列強による圧制から高い精神性を誇るアジア諸国を守るべく、アジアに相応する制度と組織である「大乘亜細亞」の建設を掲げ、実現を目指して実践に移していったのである<sup>92</sup>。

米騒動に揺れた1918年、大川は国家変革に関心のある者が集った老社会に参加し、満川亀太郎、北一輝、権藤成卿、高島素之、堺利彦、大井憲太郎、下中弥三郎らと意見を交わし、翌1919年に北一輝、満川亀太郎とともにアジアの解放と国内改造を目的とした猶存社を結成する。老社会そのものは明確なイデオロギーを持たず自然消滅的に潰えたが、社会主義や皇室中心主義、普通選挙制度や民主主義といった時事問題を含め多様な論題が多様な人物によって議論された「貯水池的役割」を果たしていた<sup>93</sup>。老社会や猶存社で北や満川と活動をする中で大川は自らの理想とする国家像、アジア像を見定めていったと考えられる。北との確執が昂じて猶存社は解散に終わるが、その後大川は社会教育研究所や大学寮で青年や軍関係者を対象とする教育活動に精を出していた。そして1925年、国家主義団体と軍閥との野合の皮切りとして重要な意味を持つ行地社を組織し、機関誌『月刊日本』を発行し、講義のみならず自らの著述を通して国家改造運動を展開していくこととなる<sup>94</sup>。

このように1910年代の大川はその宗教論を固めながら、それと併行して日本やアジアへの関心を強めつつあった。日本やアジアに関する大川の分析と思索は1920年代に入りいくつかの著作として結実する。それらが、日本の通史を描いた『日本文明史』（1921年）、歴史上の日本精神の代表者9人を究明した『日本精神研究』（1927年）であり、アジア諸民族の独立運動が分析されてアジア復興とその統一が力説された『復興亜細亞の諸問題』（1922年）、東西対抗史観から日米開戦が予言された『亜細亞・歐羅巴・日本』（1925年）である。とりわけ『日本文明史』は大川の歴史観が描かれており、重要である。天皇親政を日本の本来の面目とし、天皇と国民の正しい関係を「君民一体」に求めていた大川は日本歴史を再編し、その理念が君民間の介在者によって妨げられようとするたびに「革命（革新）」が起り、君側の奸を征討してきたという歴史像を描いていた<sup>95</sup>。1918年4月に満鉄東亜経済調査局に採用されていた大川は、植民会社の研究をしながらこれらの著作を書き上げた<sup>96</sup>。

ここまで大川の日本への関心とアジアへの関心をそれぞれ追ってきたわけだが、『復興亜細

亜の諸問題』に明確に示されているように、両者は別個のものではなかった。「日本は『大乘相応の地』である」<sup>97</sup>と信じる大川は、国家改造とアジア復興について以下のように論じている。

日本の現状、今日の如くなる限り、到底亜細亜救拯の重任に堪えず、亜細亜諸国また決して日本に信頼せぬであらう。…(中略)…吾等の手に在る剣は双刃の剣である。其剣は、亜細亜に漲る不義に対して峻厳なると同時に、日本に巢喰う邪悪に対して更に秋霜烈日の如し。かくて亜細亜復興の戦士は否応なく日本改造の戦士でなければならぬ。啐啄一時、大乘日本の建設こそ、取りも直さず真亜細亜の誕生である。<sup>98</sup>

大川の家改造論は、アジアの「不義」と日本の「邪悪」の双方に矛先が向けられていた。日本の国内改造（大乘日本の建設）とアジアの救済・解放（亜細亜救拯）という二つの実践目標は、「真亜細亜の誕生」（アジア統一）という最終目的の下で直接的に接続するものだったわけである。

大川は近代ヨーロッパの思潮を、政治面での民主主義、経済面での資本主義、思想面での合理主義（主知主義）と把握していた<sup>99</sup>。人格や精神より物質的富が重視され、金権政治が跋扈するという墮落した日本の姿が西洋的資本主義によってもたらされたと理解していた大川は<sup>100</sup>、民主主義国家について「理想の為に善戦し、志業の為に健闘するの精神を失へる国家」と批判していた<sup>101</sup>。圧政に晒されるインドの状況がそのような白人主導の近代西洋文明による世界制覇の歩みと映っていた大川であったから<sup>102</sup>、資本主義を軸とする近代西洋文明は「亜細亜に漲る不義」そして「日本に巢喰う邪悪」の元凶として強く敵視されたわけである。大川が日本によるアジア統一後の向かう先に「東西両強国の生命を賭しての戦」を経た世界統一を見据えていたことは言うまでもない<sup>103</sup>。

## (2) 生命国家論

大川の家改造の思想は、行地社設立時に掲げられた七綱領（維新日本の建設、国民的理想の確立、精神生活に於ける自由の実現、政治生活に於ける平等の実現、経済生活に於ける友愛の実現、有色民族の解放、世界の道義的統一）に集約されている。維新日本の建設と道義的世界統一を二つの核とする理論は、先に確認した『復興亜細亜の諸問題』にも見られる大川の家改造論の骨子である。大川は自らの家改造を、自身の歴史観において「革命（革新）」とした明治維新（「第一維新」）を補完する「第二維新」と位置づけていた<sup>104</sup>。

大川は日本をどのような国家へと変容せしめようとしたのか。行地社設立から五・一五事件で逮捕されるまで、大川は精力的に執筆活動を行っていた。以下、主に1925年から1932年までの著作を対象として、大川の家改造運動の思想を解明すべく、まず大川の家観を確認し、次に大川が家改造の範とした道義国家日本（維新日本）の姿について分析していくこととする。

大川の家観は、行地社綱領の一つを冠した論文「国民的理想の確立」（1927年）に象徴的に表れている。大川は、「国家は至高至大の組織体であり、国家以上の個体が無い」<sup>105</sup>とまで「国家」を高く評価していた。本来、一定の制度的要件を満たした共同体を意味するのみである「国家」が「絶対の組織体」<sup>106</sup>にまで価値が高められた背景には、国家を「生命」の表出とみる家観が存在していた。

現実の国家は、個人の幸福又は公衆の福利と云ふが如き抽象的概念以外、別に一個潑刺たる生命を原動力として存立して居る。国家は実に国民的生命の発現であり、国家一切の機関は国家が其の生を営まんが為の構造組織なるが故に、苟くも国家の名に値する国家に於ては、民族の性情を経とし多年の歴史を緯として鍛錬せられたる国民精神が、実に国家の心血として其の一切の機関に貫徹し周流して居る。この精神、この国民的生命こそ、国家存立の最後の原動力である。<sup>107</sup>

真の実在を「生命」と見、その政治経済的次元での発現を「国家」と捉える大川の国家観である。他方、「国民的生命」の内的面的表出は「国家の心血」たる「国民精神」と示されている。大川における「生命」が高い理想を追求し、その理想こそが「生命」の第一義となることは第二節で見えてきたが、国家論の場合、その理想に国民が従属する構図として示される。「国家は理想のために存在し、国民は国家の理想に献身することによって、人間としての意義及び価値が確立せらるる」<sup>108</sup>と、断言されてしまう。大川において人間は生得的に尊重される存在ではなく、国家への貢献によって初めて意義と価値が認められるのである。

次に、大川が国家改造の範とした道義国家日本を見ていく。建設されるべき新たな日本とはどのような国家であったのか。講演筆記を基にした『日本及日本人の道』（1926年）にその全貌が明らかとなっている。大川は自らの根本思想である生命思想から導いた抽象的・普遍的な「道義国家の原則」を前提として、その上で他国（他地域）との比較において日本に本然の道義国家像を描き出していた。大塚や前川が検討した大川の「道徳哲学」も、彼の思想の根本基調をなす生命主義思想から導かれたものである<sup>109</sup>。大川は日本と西洋との大きな相違が「宗教」や「道徳」として表れる道徳感情「敬畏」に最も象徴的に表れると論じる。日本に特有の宗教観が日本本然の道義国家像に大きく反映されるわけである。

大川は「敬畏」の原始的形態を「生命の本原」たる父母への尊敬と畏怖の念であると考えていた。この背景には、「総ての人間、若しくは総ての生物に共通なる一の生命」の存在を認め、「我々の生命の背後には、其の生命の根柢となれる大なる生命があ」と捉える大川の生命観があった<sup>110</sup>。1910年代の宗教論にも見られた、大川の思想の基底にある連続的、一体的な生命観である。大川は「敬畏」の歴史的な歩みは日本と西洋では異なり、日本では宗教同士の抗争がなかったため、日本人の精神生活において道徳と宗教が対立せず、生命の本原である父母への「敬畏」が受け継がれてそのまま宗教化したことで、日本人の宗教は父母への「孝」となったと説いている<sup>111</sup>。

このように「孝」を宗教とするという日本の特徴が導かれ、それが道義国家日本の特徴ともなる。このとき、大川が天皇制を天壤無窮の万世一系のものと認識していたことで、日本人が「生命の本原」である血縁的結合を父母を越えて無限に遡及した際、「共通なる一の生命」としての皇祖に辿り着くため、連綿と続く皇室こそが先祖、国祖として「孝」の対象、すなわち宗教的存在と見做されていた。皇室は一貫して日本国民の生活の中心であり続けてきたため、日本国民は皇室の「分霊」<sup>112</sup>として天皇（制）を信仰することが自明視されるわけである。当時の天皇も「国祖の現身」<sup>113</sup>と位置づけられ、宗教的对象とされている。「吾々は親を通して、また君を通して、…(中略)…宇宙的生命に連なることが出来る」<sup>114</sup>。つまり、大塚が的確に指摘したように、忠君と孝行が連続したものと示されるわけである<sup>115</sup>。天皇を「生命の本原」とする大川の国家観は、『日本及日本人の道』の以下の引用に端的に表れている。

日本国に於て、国民は天皇を通じて自己の生命の本源に連つて居ります。総ての生命を統一する最高の生命が、日本の国家に於ては天皇によつて表現されて我々に対して居るのであります。斯くの如く国民と天皇との関係が、子と其の親との如くであるから、…<sup>116</sup>

ここで日本国民は天皇を通じて「生命の本原」に連なり、天皇こそはすべての生命を統一する「最高の生命」と捉えられている。大川が説いた道義国家日本は、国民の遡及的血縁関係の想像上に天皇が据えられ、親子関係に擬せられた生命国家であった。その際、天皇は政治上の国家君主を超えた宗教的最高存在として位置づけられる。道義国家日本とは、その内実を天皇を宗教の対象と仰ぐ国家の謂である。おそらくは大川の脳裡には「天壤無窮の皇運」という教育勅語の一節が刻み込まれ、万世一系とされた皇統に過去、現在、未来を貫徹する「永遠の生命」を見出したことは想像に難くない。道義国家日本で肇国以来引き継がれてきた「孝」が宗教とされたことも、時間を超越する「生命」の精神面での表出として大川の理想たり得たわけである。当然、大川の生命主義思想の極致たる無限の「生命」は空間的規定にも影響を及ぼす。皇統という超越生命の政治経済的次元での表出は、皇室と血縁をもつ国民から成る「皇国」であるが、それは物理空間に限定されないものである。道義国家として日本はアジアそして世界への拡張を使命として帯びるであろう。

実際、道義国家日本の拡張の理路は、「吾等の成就すべき大業は…(中略)…「日本」の衷に渾然として存する生命の、統一的・総合的完成に外ならぬ」<sup>117</sup>と言明される。当然この「完成」は日本に収まらない、世界を視野に入れたものであり、同時並行的に宗教的側面の完成をも見据えた、理想の極致を意味するものであった。

吾等は此の志の為に戦はねばならぬ。一切の外敵、一切の内憂を克服せねばならぬ。…(中略)…吾等の歴史は、過去に於て実に統一の為に戦ひを以て終始した。此の祖先の戦を継承し行く所に、吾等の生存の意義があり、生命の完成がある。<sup>118</sup>

「生命の完成」は歴史的意義を持ち、その過程には諸外国・諸地域との武力衝突をも辞さないとする「生命」の論理である<sup>119</sup>。不断の精神的奮闘を伴うオイケンの「生命過程」と軌を一にするかのように、「生命の完成」までの過程に国家生命としての継続的な政治的奮闘(=「戦」)が必然であることが示されている。ここには国民のための国家ではなく、徹底して理想境地である国家生命完成のための国民とする、戦闘主義的な全体主義国家論の様相を見せる生命国家論の論理が見てとれる。

以上、大川の家國観を検討し、彼が国家改造の範とした道義国家日本の姿を見定めてきた。大川は世界の根本原理である「生命」の政治経済的次元での表出を「国家」と理解し、国民を国家の理想に献身する存在と位置づけていた。そのような国家理解を前提に、大川は日本の本然の姿を説明する。道義国家日本は万世一系の天皇を要とする宗教国家と示されたわけだが、これこそが生命主義者大川の辿り着いた究極の超越生命であった。精神面においては天壤無窮とされた皇統に「永遠の生命」を見出し、政治経済面にあつては国家を超えた拡張を自明のものとする、そのような「生命の完成」を目指す生命国家論は理想の極致を現実世界に顕現する存在として大川の心酔の対象となったわけであった。

1920年代に完成した生命国家論は、その後も『日本二千六百年史』(1939年)に「吾等は永

遠より永遠に亙る日本の生命の一断面であり、「日本に於ては、国祖に於て国家的生命の本源を認め」と記され<sup>120</sup>、あるいは『新東洋精神』（1945年）にも「日本の生命は、驚くべく強靱にして豊富である」と綴られたように、その表出が確認される<sup>121</sup>。五・一五事件に伴う投出獄、またアジア・太平洋戦争を経ても、大川における生命国家観は一貫して維持され続けたのである。

## 5. 結語

ここまで見てきたように、明治末からアジア・太平洋戦争期にかけての大川周明の思想の軌跡は、偏に彼の理想を反映した超越的生命の探究の軌跡であった。1910年代、「真実の宗教」を求めて宗教学研究に打ち込んでいた大川は、オイケンを初めとした西欧の生の哲学を摂取しながら、自らの宗教思想を生命主義宗教論として練り上げていた。そのような中、歴代天皇記の執筆、岡倉天心やコットン著『新印度』から影響を受けた形で日本とアジアに関心を向け、思想的探究の対象であった「超越生命」を、現実の相に顕現しうるものとして見出すこととなる。それが万世一系とされた皇統であり、そこに大川は「永遠の生命」を看取したわけである。大川はその宗教思想の真髄である「永遠の生命」という形而上的観念を、皇国史観と融合させた形で「生命国家論」として鋳直し、形而下において「永遠の生命」の顕現と拡張を実現しようとしたのである。

しかしそこには看過しがたい二重の矛盾が横たわっている。まず「生命」とは死を宿命づけられているがゆえに有限であるため、「永遠の生命」自体が絶対的に矛盾した観念である。しかも大川は、自らが生まれ育った既存の国家に「永遠の生命」を託し、この矛盾的観念のもとに形而下の世界を一挙に全面改造しようと志したのであった。しかし政治的・宗教的世界統一を志向することを「生命の完成」として掲げる生命国家論は、国家の生命に国民が従属・献身することを大義として要求し、無謀な戦闘主義による国内改造と対外侵出が必然視されるという帰結としてその矛盾を露呈するに至る。「生命」をいかなる価値より上位におくはずの生命主義が、「永遠の生命」、すなわち国家の永続をこそ至上命題とする生命国家論へと帰着し、国内外を問わない個人の「生命」を軽視する全体主義国家論と化した思想史的経緯はこうしたものであった。人格の完成を目指す生の哲学に端を発した大川の宗教論が容易に全体主義国家論へと旋回を遂げてしまったのは、ある特定の歴史的・社会的文脈によって設立された制度である国家（リヴァイアサン）が普遍的生命を有するものと見誤られ、その発現であるとさえ偽られたことの悲劇的顛末である。

## 注

- 1 陸軍省新聞班「国防の本義と其強化の提唱」, 高橋正衛編『現代史資料(5) 国家主義運動2』, みすず書房, 1964年, 266頁
- 2 『國體の本義』, 文部省, 1937年, 16頁
- 3 『臣民の道』, 教學局, 1941年, 8頁
- 4 『大政翼賛會實踐要綱の基本解説』, 大政翼賛會宣傳部, 1941年, 2頁
- 5 鈴木貞美『生命観の探究—重層する危機のなかで』, 作品社, 2007年, 11頁
- 6 同書, 621頁
- 7 鈴木貞美『「生命」で読む日本近代—大正生命主義の誕生と展開』, 日本放送出版協会, 1996年, 251頁
- 8 大川周明「国民的理想の確立」, 『大川周明全集 第四巻』, 1962年, 岩崎書店, 478頁(初出:『月刊日本』第23号, 行地社, 1927年2月)
- 9 大川周明『日本及日本人の道』, 『大川周明全集 第一巻』, 1961年, 岩崎書店, 50頁(出版:行地社出版部, 1926年)
- 10 鈴木前掲『生命観の探究』, 459-460頁
- 11 筆者はかつて大川周明の生命国家論を指摘している(伊東順真「下中弥三郎における生命主義教育論—デモクラシーとファシズムの間(あいだ)」, 『教育学研究』, 日本教育学会, 第88巻第3号, 2021年, 400-401頁)。
- 12 竹内好「アジア主義の展望」, 同編『現代日本思想体系9 アジア主義』, 筑摩書房, 1963年, 50-52頁
- 13 橋川文三「解説」, 同編『近代日本思想体系21 大川周明集』, 筑摩書房, 1975年, 407-443頁
- 14 竹内好「大川周明のアジア研究」, 同『近代の超克』, 筑摩書房, 1983年, 165-186頁(出版:1970年)
- 15 臼杵陽『大川周明—イスラームと天皇のはざままで』, 青土社, 2010年
- 16 松本健一『大川周明』, 岩波書店, 2004年
- 17 同書, 58-60頁
- 18 刈田徹『大川周明と国家改造運動』, 人間の科学新社, 2001年
- 19 昆野伸幸『増補改訂 近代日本の国体論—〈皇国史観〉再考』, ぺりかん社, 2019年
- 20 昆野伸幸「大川周明『日本二千六百年史』不敬書事件再考」, 同書, 188-219頁, 大川周明『日本二千六百年史』, 前掲『大川周明全集 第一巻』, 720頁(出版:第一書房, 1939年)
- 21 大塚健洋『大川周明—ある復古主義者の思想』, 講談社, 2009年
- 22 同書, 145-148頁
- 23 同書, 225頁
- 24 前川理子「大川周明の日本精神論」, 同『近代日本の宗教論と国家—宗教学の思想と国民教育の交錯』, 東京大学出版会, 2015年, 248-313頁
- 25 同論文, 303頁
- 26 大川周明「ソロヴィエフの戦争論」, 前掲『大川周明全集 第四巻』, 543-560頁(初出:『月刊日本』第39号, 行地社, 1928年6月)
- 27 大川周明顕彰会編『大川周明日記』, 岩崎学術出版社, 1986年, 52頁
- 28 大川周明『安楽の門』, 前掲『大川周明全集 第一巻』, 773-776頁(出版:出雲書房, 1951年)
- 29 大川周明「吾は個人主義者也故に吾は社会主義者也」, 『新紀元』, 新紀元社, 第8号, 1906年, 10頁
- 30 大川前掲『安楽の門』, 777頁
- 31 大塚前掲書, 64-65頁

- 32 「養真会」については刈田徹「道会機関紙誌『道』の「解題」ならびに「総目次」—大川周明に関する基礎的研究の一環として（その1）」（『拓殖大学論集』、第158巻、1985年、187-235頁）を参照。
- 33 斯禹生（大川周明）「久遠の生命」、『道』、道會、第73号、1914年、45-46頁
- 34 同論文、42、46頁
- 35 大川周明「養眞の意義」、『真人』、養眞會出版部、第54号、1915年、19頁
- 36 大川周明「反省と感謝」、『真人』、養眞會出版部、第55号、1916年、13頁
- 37 大川周明「宗教講話（其一）」、『道』、道會、第53号、1912年、37頁
- 38 大川周明「平凡の偉大化」、『真人』、養眞會出版部、第44号、1915年、17頁
- 39 大川前掲「宗教講話（其一）」、33-34頁
- 40 大川周明「施恩報恩」、『真人』、養眞會出版部、第71号、1917年、7頁
- 41 大川周明「一人のために死ぬころ」、『真人』、養眞會出版部、第62号、1916年、13-14頁
- 42 大川周明「日本精神の躍進」、『真人』、養眞會出版部、第68号、1917年、7頁
- 43 大川周明『宗教原理講話』、『大川周明全集 第三巻』、岩崎書店、1962年、354頁（出版：東京刊行社、1920年）
- 44 大川前掲『安楽の門』、878頁
- 45 大川周明「宗教論」、前掲『大川周明全集 第三巻』、215頁
- 46 大川周明「全人的生活」、『真人』、養眞會出版部、第47号、1915年、26頁
- 47 大川周明「大日本帝國の使命」、『真人』、養眞會出版部、第80号、1918年、10頁
- 48 斯禹生前掲論文、43頁
- 49 大川周明「生命の完成」、『真人』、養眞會出版部、第48号、1915年、22頁
- 50 大川前掲「一人のために死ぬころ」、11-14頁
- 51 斯禹生前掲論文、40-44頁
- 52 同論文、43-44頁
- 53 大川前掲「大日本帝國の使命」、10-11頁
- 54 大川前掲『安楽の門』、793-794頁、鈴木前掲『生命観の探究』、459-460頁
- 55 大川前掲『安楽の門』、793-794頁。宗教家押川方義（1850-1928）は当時宗教そのものへの信仰を説いていたが、かつては名高いキリスト者であった。福音書には「永遠の生命（とこしへのいのち）」という言葉が繰り返される（マタイ19:16、19:29、25:46、マルコ10:17、10:30、ルカ10:25、18:18、18:30など）。押川がキリスト教から「永遠の生命」という言葉を摂取したことは明らかである。キリスト教と「生命」概念の関係についても、今後の更なる検討が期される。
- 56 同書、794頁
- 57 「日曜講演」、『道』、道會、第54号、1912年、79頁
- 58 中村雄二郎「哲学における生命主義」、鈴木貞美編『大正生命主義と現代』、河出書房新社、1995年、30頁
- 59 同論文、26頁
- 60 ハンス・ドリーシュ「生氣論の歴史と理論」米本昌平訳、書籍工房早山、2007年
- 61 高山岩男「生の哲學の立場について」、『理想』、理想社、第51号、1934年、5-26頁、ヘルベルト・シュネーデルバッハ『ドイツ哲学史1831-1933』船山俊明他訳、法政大学出版局、2009年、O・F・ボルノー『生の哲学』戸田春夫訳、玉川大学出版部、1975年
- 62 宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」、『人文』、学習院大学、第4号、2005年、83-104頁
- 63 夏目漱石「私の個人主義」、『漱石全集 第十六巻』、岩波書店、1995年、593頁（初出：学習院輔仁会講演、

- 1914年11月25日)。漱石のオイケン批判は「思ひ出す事など」第27節（『漱石全集 第十二巻』、岩波書店、1994年、434-437頁（初出：東京朝日新聞、1911年1月28日））。
- 64 井上哲次郎「オイケンの哲學と我國の現状」、『東亞の光』、東亞協會、第9巻第3号、1914年、1頁
- 65 加藤直士「新理想主義の哲學」、『基督教世界』、第1549号、1913年5月29日、1頁
- 66 日本での流行と時を同じくして、アメリカでも「昨今ベルグソンやオイツケンで持ち切り」という様子であった（大住舜「オイケンの人生と宗教」、『開拓者』、日本基督教青年會同盟、第7巻第7号、1912年、48頁）。
- 67 白川龍太郎（大川周明）「獨逸に於ける宗教思潮」、『道』、道會、第47号、1912年、12-13頁
- 68 大川周明「新刊 オイケンの『新理想主義の哲學』」、『道』、道會、第64号、1913年、70-71頁
- 69 大川周明「明治四十五年～大正二年十日 榊原政雄宛」、前掲『大川周明関係文書』、401頁、同前掲「養眞の意義」、19頁
- 70 大川の語学力は、1910年代には「英、仏、独、梵語に通曉し、更に支那語、ギリシャ語、アラビヤ語等をも学んだ」という状況であった（「大川周明略伝」、前掲『大川周明全集 第一巻』、4頁）。
- 71 「オイケン氏に就きて」、『兒童研究』、日本兒童學會、第3巻第6号、1900年、42-43頁
- 72 井上前掲論文、3頁
- 73 Eucken, R., *Hauptprobleme der Religionsphilosophie der gegenwart*, Verlag von Reuther & Reichard, Berlin, 1912, SS.15-17（オイケン『現代宗教哲學の主要問題』加藤直士訳、警醒社書店、1913年、30-34頁）
- 74 Eucken, R., *Der Kampf um einen geistigen Lebensinhalt : neue Grundlegung einer Weltanschauung*, Verlag von Veit & Comp., Leipzig, 1869, SS.107-110, 346-347（オイケン『新理想主義の哲學』波多野清一・宮本和吉訳、内田老鶴圃、1913年、155-160, 512-513頁）
- 75 Eucken, R., *Der Wahrheitsgehalt der Religion*, Verlag von Veit & Comp., Leipzig, 1912, SS.365-366（オイケン『宗教の眞諦』三並良訳、大日本文明協會、1921年、200頁（下巻））。
- 76 Ebd., S.149（オイケン前掲『宗教の眞諦』、262頁（上巻））、加藤直士「序に代へて」、オイケン前掲『現代宗教哲學の主要問題』、53-54頁
- 77 Eucken, *Der Kampf um einen geistigen Lebensinhalt*, SS.3-4, 7, 164-170（オイケン前掲『新理想主義の哲學』、5-6, 10, 239-248頁）
- 78 大川周明『日本的言行』、前掲『大川周明全集 第一巻』、363頁（出版：行地社、1930年）
- 79 例えば大川周明『歐羅巴・亜細亞・日本』、前掲『大川周明全集 第二巻』、866頁（出版：大東文化協會、1925年）。大川は当時のアジア地域の政治的動揺について「その表面に現れるところは、政治的乃至経済的である。而も其の奥深く流れるところのものは実に徹底して精神的である」と、その両面を指摘して説明している。
- 80 大川前掲『宗教原理講話』、423頁
- 81 大川周明『復興亜細亞の諸問題』、『大川周明全集 第二巻』、岩崎書店、1962年、6頁（出版：大鏡閣、1922年）
- 82 大川周明『復興印度の精神的根據』、東洋研究會出版、1924年、69頁
- 83 大川前掲『安樂の門』、756頁
- 84 大川周明「偶然なる思想の一大轉機」、『道』、道會、第167号、1922年、83頁、同前掲『安樂の門』、803頁
- 85 大川周明「大正二年六月日不明 榊原政雄（推定）宛」、前掲『大川周明関係文書』、396頁
- 86 「尋問調書（大川周明）」、高橋編前掲書、684-685頁（初出：「橋孝三郎外十九名に対する爆発物取締罰則違反殺人等被告事件判決」第老冊、1933年）、大川周明『日本文明史』、大鏡閣、1921年、368頁

- 87 大塚前掲書, 74-75頁
- 88 大川前掲『日本文明史』, 7頁(序)
- 89 大塚前掲書, 75頁
- 90 「美とは宇宙に遍在する生命の原理であり, 星の光のうちに, また花の鮮かな色彩, 過ぎゆく雲の動き, 流れゆく水の運動のうちにきらめくものである。宇宙の大霊は, 人間と自然に相等しく浸透して, 宇宙の生命を瞑想のうちに観照するわれらの前に広がる。生命存在のもろもろの驚くべき諸現象のうちに, 藝術家の精神がみずからを映し得る鏡が見出されるだろう」(岡倉天心『東洋の理想』佐伯彰一訳, 『岡倉天心全集 第一巻』, 平凡社, 1980年, 86頁)。鈴木貞美もまた, 生命主義における岡倉天心の先駆性を指摘している(鈴木前掲『生命観の探究』, 336-344頁)。
- 91 大川前掲『安楽の門』, 788-789頁
- 92 同書, 789-790頁
- 93 木下半次『日本国家主義運動史 I』, 福村出版, 1971年, 35頁, 満川龜太郎『三國干渉以後』, 平凡社, 1935年, 182-201, 211-215頁
- 94 「民間に於ける革新運動の萌芽」, 今井清一・高橋正衛編『現代史資料(4) 国家主義運動 1』, みすず書房, 1963年, 22-29頁(初出:「思想研究資料特輯第五十三号」, 司法省刑事局, 1939年), 木下前掲書, 46頁
- 95 大川前掲『日本文明史』, 大川周明『國史讀本』, 先進社, 1931年, 280-281頁
- 96 大塚前掲書, 111-113頁
- 97 大川前掲『復興亜細亜の諸問題』, 6頁
- 98 同書, 7頁
- 99 大川前掲『日本及日本人の道』, 71頁, 同前掲『欧羅巴・亜細亜・日本』, 864頁
- 100 大川周明「経済生活に於ける友愛の実現」, 前掲『大川周明全集 第一巻』, 95-103頁(初出:『月刊日本』第28号, 行地社, 1927年7月)
- 101 大川前掲「国民的理想の確立」, 475頁
- 102 大川前掲「経済生活に於ける友愛の実現」, 95-103頁
- 103 大川前掲『欧羅巴・亜細亜・日本』, 870-873頁。事実, 1941年には「世界史の究極は, 人類全体を統一する具体的組織の実現である」と端的に明言されている(大川周明「東亜共同体の意義」, 前掲『大川周明全集 第二巻』, 883頁(初出:『新亜細亜』, 南満州鉄道株式会社東亜経済調査局, 1941年)。
- 104 大川前掲『國史讀本』, 280-281頁
- 105 大川前掲「国民的理想の確立」, 481頁
- 106 同論文, 478頁
- 107 同上
- 108 同上
- 109 大塚前掲書, 148-155頁, 前川前掲論文, 281-288頁。大川は自身の体系的な道德哲学の中で, 人間個人の道德原則である「人格的生活の原則」と国家の道德原則である「道義国家の原則」を導いている。大川の一連の道德観を以下に記す。大川は自己を取り巻く客観世界を, 自己より高価値のもの, 自己と同価値のもの, 自己より低価値のものに三分類し, それぞれに対する自然的道德感情を「敬畏」, 「愛憐」, 「羞恥」と説き, 加えて敬畏・愛憐・羞恥を自己の生活のうちに正しく実現することを「敬天」, 「愛人」, 「克己」と説明した。これらの道德的原則を全うする生活が「人格的生活」である。大川の道德観に特徴的であるのは, 彼が個人と社会とを依存し合う一実体と把握するため, 人格的生活の原則は個人のみならず社会にも適応される点である。個人の内面的道德の深度に比して社会の規模も拡大すると説明される。以下, 社

会として今日の最高到達段階と示された「国家」の側面から道徳哲学を述べれば、尊重すべき文教、価値対等の国家、統御すべき自然という三方面との関わりが「精神生活」、「政治生活」、「経済生活」と規定され、実現が期待される道義国家の原則がそれぞれ「自由」、「平等」、「友愛」と示される。これは行地社の綱領に掲げられた通りである。無論、道義国家の原則（自由・平等・友愛）と人格的生活の原則（敬天・愛人・克己）は表裏一体かつ不可分なものである。（大川前掲『日本及日本人の道』、4-76頁）

- 110 大川前掲『日本及日本人の道』、18頁
- 111 同書、22-25頁
- 112 同書、46頁
- 113 同書、49頁
- 114 大川周明「藁田氏の批評を読む」、前掲『大川周明全集 第四巻』、588頁（初出：『月刊日本』第15号、行地社、1926年6月）
- 115 大塚前掲書、156-158頁。近代日本の忠君と孝行については石田雄「家族國家觀の構造と機能」が詳しい（同『明治政治思想史研究』、未来社、1954年、3-215頁）。
- 116 大川前掲『日本及日本人の道』、50頁
- 117 大川周明「日本の志」、前掲『大川周明全集 第四巻』、611-612頁（初出：『月刊日本』第41号、行地社、1928年8月）
- 118 同論文、612頁
- 119 「生命の完成」という膨張主義は、満州事変をも国家生命の発現としてむしろ賞揚したであろう。1937年9月18日、大川は日記に以下のように記している。「満州事変記念日、若干感慨あり。屈指の好日」（大川周明顕彰会編前掲書、174頁）。
- 120 大川前掲『日本二千六百年史』、483、500頁
- 121 大川周明『新東洋精神』、前掲『大川周明全集 第二巻』、945頁（出版：新京出版、1945年）

# Okawa Shumei's Theory of the Life State

ITO Junshin

## Key Words

Okawa Shumei, Vitalism, Religion, Eternal Life, Life State, R. Eucken

## Abstract

This paper focuses on Okawa Shumei(1886-1957), the theoretical leader of Japanese fascism, and examines his discourse of life.

Since his student days, Okawa was searching for a 'true religion', and in the 1910s, he examined the views of Rudolf Eucken and other Western-derived philosophies of life and formulated his own theory of religion. He adhered to a life-oriented religion in which union with a 'transcendent life' was the ideal state of being.

Eventually, Okawa became interested in Japan and Asia and discovered transcendent life—the object of his speculative search—in the 'lineage of all generations', the keystone of the Japanese emperor system. This finding led to the development of Okawa's life-oriented thought, which had been a metaphysical speculation, as a theory aimed at the manifestation of a 'life state' in the real world, with the emperor at its center.

Okawa's theory of the life state was directed towards political and religious unification of the world and regarded militant domestic remodeling and foreign invasion as inevitable steps in that process. Originally, however, the 'nation' was nothing more than an institution. It was the identification of the nation as having a life, and even the pretense of its manifestation, that led to Okawa's theory of the life state: a totalitarian theory of the state that subordinates and devotes people to the life state and makes its perpetuation as a nation the supreme objective. This is how the logic of neglecting the life of the individual while upholding the life of the nation was established.

